

上勝中学校  
「学力向上実行プラン」

学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

○すべての生徒が「わかる」「できる」と感じることができる授業の実践  
○認め合い、話し合い、学び合う授業の実践

学力向上検討委員会構成

学力向上推進員	委員
教務主任 研修主任 春木 幸恵	校長 倉橋 誠一 教頭 吉岡 博文 1年担任 川口 紗季 2年担任 入口 稔己 3年担任 濱 文和

校長

倉橋 誠一

【各校の取組状況の把握について】

管理職による授業参観や教員からの報告等、様々な機会を捉え、取組状況の把握を行う。

◎次の(1)～(3)をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

(1)知識・技能の習得

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○全般的に素直で前向きで、何事にも真面目に取り組むことができる。 ●実力テストなどの出題範囲が広いテストでは、定期テストと比べ正答率が下がる。	・授業に真面目に取り組み、基礎的・基本的な知識・技能を習得することができる。 ・知識・技能の定着を図るため、家庭学習及びテスト前の学習に計画的に取り組むことができる。	・教科書の重要語句や問題提起部分にアンダーラインや○で囲ませる。 ・単元終了時に課題を明らかにし、すべての生徒が課題を提出できるよう支援を行う。	定期テストの結果から、数名の生徒の基礎的・基本的な知識・技能の習得ができていないことが明らかになった。ケース会議等を開き、生徒の実態に応じた学習形態や支援の方法について共通理解を図り、それぞれの教科における知識等の習得をより徹底していく。	・すべての教員がアンダーラインを入れさせることができ、その結果生徒が学習を振り返る時に重要語句を意識できるようになった。 ・提出期限を過ぎることもあったが、全教科で全員の生徒が課題を提出することができた。期限内に提出できるよう継続指導が必要である。	身に付けた知識等を表現するために、「書く」活動の機会を多く取り入れる。身に付けた知識等を実際の場面で活用できるよう、主体的・対話的で深い学びのさらなる実現を促進する。課題の提出期限を教員だけでなく、生徒自身が管理できる手立てを考える。

(2)思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○授業中に進んで発表し、課題に意欲的に取り組むことができる。 ○生徒数が少ないため、学校生活の中で一人一人が活躍する場面が多い。 ●思考力や長文での記述を必要とする問題では、他の問題と比べ正答率が下がる。	・自分の考えを、根拠や理由を明確にしながらか説明したり、書いたりして伝えることができる。 ・各授業における課題に対する話し合い活動を通して、解決する方法を考えることができる。	・毎日テーマを決めて、自分の考えや意見を生活記録に書かせ(3文以上)、コメントを書いて返す。 ・終学活で1分間スピーチを実施する。 ・生徒の発言や発表の内容に応じ、「なぜ」、「どうして」などの更なる発問を行い、生徒の考えを深めさせる。	生活記録や1分間スピーチを継続して実施する。各授業では個人で考える時間をしっかりと確保する。また、生徒が人前で発表する機会をより多く設定する。	・生活記録や1分間スピーチをすべての学級で設定できたが、全員の生徒が毎日生活記録を提出することはできず、スピーチもかなり話せるようにはなつたが1分続かないこともあった。 ・生徒の発言を待つよう心がけたが、待つことができないこともあった。 ・「なぜ」、「どうして」の発問に対して「分かりません」の返答があり、深い学びにつなげることが難しかった。	学習規律、板書の仕方、ノート指導等、学校で統一できるところは統一するなど、より効果的な実践を行う。授業計画の改善を進め、生徒の思考力・判断力・表現力のさらなる育成を図る。

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○ノーチャーム着席、朝の自習、エクストラスタディーズなど、基本的な学習規律を守って主体的に学習に取り組むことができる。 ●すべての生徒が、課題を期限内に提出することはできていない。	・各教科の学習に主体的に取り組むことができる。 ・自分の学習の状況をしっかりと振り返り、自らの課題を解決できるよう計画を立て、実践することができる。	・「とくしま授業技術の基礎・基本」にあるICT活用を実践する。 ・「何を」「どのように学ぶのか」が生徒に伝わるよう、「授業のめあて」「学習の流れ」を提示する。 ・振り返りの視点を生徒に示し、時間を確保する。	ICT活用は個人差が大きく、全員の教員が授業で使えるよう研修等を積極的に行っていく。	・前年度より確実に教員のICT活用が積極的に行われるようになった。しかしタブレットの活用については、教員によって大きな差が見られた。 ・ほとんどの授業で「授業のめあて」「学習の流れ」を提示し、生徒達が主体的に授業にのぞむことができた。 ・振り返りをさせることはできたが、記述させる時間が足りないこともあった。	ノート、ワークシート、タブレットのそれぞれの特徴が活かされる授業を各教科で考える。また、各教科において育成を目指す資質・能力の育成を図れる授業改善を進めると共に、授業でのタブレット活用を推し進めていく。

令和3年度 学力向上ロードマップ

